内面糸切り痕をもつ山茶碗片をめぐって

野　末　浩　之

1　はじめに

1985年3月～4月にかけて、愛知県西加茂郡藤岡町西中山所在の中清田（なかせいだ）古窯跡群の発掘調査が同窯跡発掘調査会によって行なわれた。(注1) 当古窯跡群は、13世紀後半～14世紀前半の時期に比定される、3基からなるいわゆる山茶碗窯で、該期のものとしては通有のものである。遺物はおびただしい量の山茶碗・小皿とともに、僅かながら灰釉瓶子片、土師器甕片等が出土した。その後の整理段階において、この3基のうちの1－C号窯より内外面に回転糸切り痕をもつ遺物が見出された。外面に回転糸切り痕をもつ杯・椀類は普通に見られるが、内面にも見られるものは極めて稀である。内面糸切り痕をもつ杯・椀類はこれまでに数例知られ、またその成形技法については「底部円柱づくり」が想定されており、従来の回転糸切り痕＝ロクロ水挽き成形という考え方に対する見直しを示唆するものとして注目された。

以下の小稿では、中清田古窯跡出土資料をもとに、関連する若干の類例をあげたうえ、改めて杯・椀類の成形技法について考えてみたい。

2　内面糸切り痕の諸例

(1)　南多摩窯址群出土例（第1図）

南多摩窯址群は、東京都西郊、多摩川中流域に面する多摩丘陵北部に展開する窯跡群であるが、このうち御殿山14号（G 14）窯内から内外面に糸切り痕をもつ須恵器杯の底部片が出土している。(注2) 破片が小さいため、内面のロクロの回転方向は不明である。糸切り痕は中心部でナデに消されている。また、ナデの縁辺には剝落痕かと思われる段差が見られる。一方、外面は無調整である。微妙ではあるが、ロクロ右回転糸切りかと推測する。

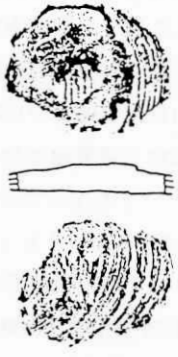
当例に加え、底部と体部の境および体部に接合痕を残すものが多いことから底部粘土板上での巻き上げ成形によるものとされ、初めて底部円柱づくりを示唆された。すなわち引用すれば、

Ⅰ　粘土塊をロクロ（回転台）にのせ、杯底部の径と同じ円柱をつくり、

Ⅱ　この円柱の上端に、別に用意した粘土紐を接合して、ロクロをまわしながら巻き上げ、

Ⅲ　ロクロの回転を利用して、器肉をととのえながら調整し、

Ⅳ　糸を用いて底部を切り離す。



第1図　南多摩窯址群出土例（S＝½）
注2文献より

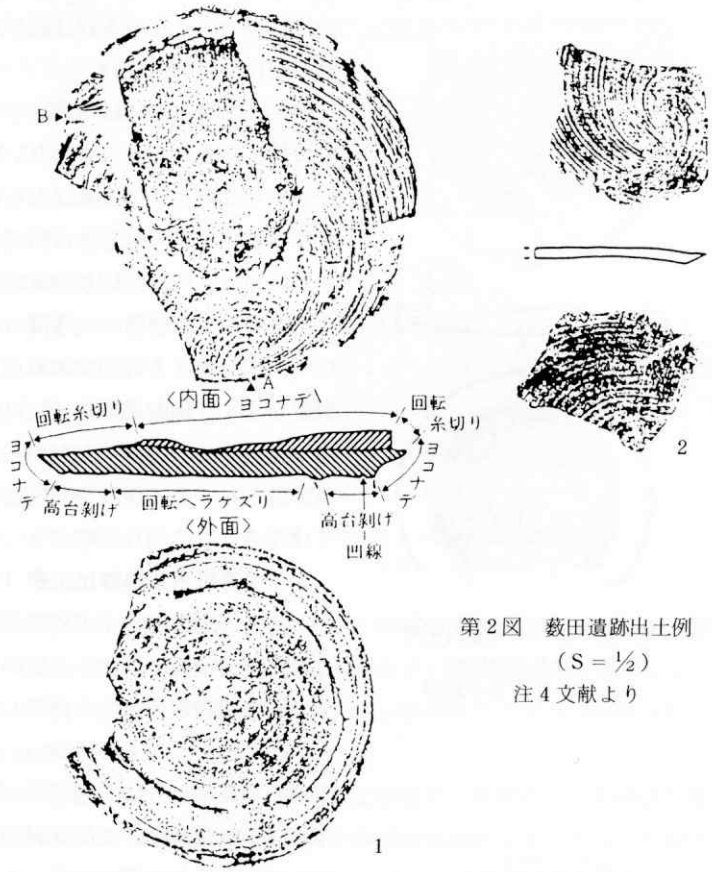
という工程を経て製作される。こうして底部となる円柱を順次切り離していくことにより、内面の糸切り痕は生まれ、しかも接合痕や杯底径の均一現象についても説明することができる。

なお、この技法は南多摩窯址群においてG 14窯式期（10世紀後半）以前にははじまると考えられている。(注3)

(2)　薮田遺跡出土例（第2図）

群馬県利根郡月夜野町所在の当遺跡の内面糸切り痕をもつ遺物は、須恵器大型高台付椀(1)と無高

台の杯かと思われるものの底部(2)である。1は内面に左回転の糸切り痕（ロクロ右回転糸切りのネガ）が残り、外面にはロクロ右回転のヘラケズリ痕が見られる。さらに、内面には底部円柱上に成形されていた粘土が一部付着している。底部円柱づくり成形を想定すれば、底部内外面に残る痕跡はロクロ回転方向に矛盾はきたさない。一方、2は内面に右回転糸切り痕（ロクロ左回転糸切りのネガ）を残すが、外面の糸切り痕からは回転方向はわからない。



第2図　薮田遺跡出土例
（S＝½）
注4文献より

報文によれば、上記の点に加え底部と体部の境に接合痕をもつものを挙げ、底部円柱づくり技法の存在を推定している。さらに、杯の外底周縁に「絞り込み」がみられ、これは底部糸切り離し時におけるアタリとして、また体部と底部円板との接合をより強固にするものとして説明されている。なお、時期的には9世紀中葉に同技法が完成するとしている。

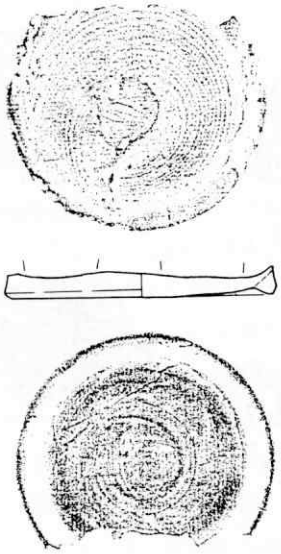
(3)　正家1号窯出土例（第3図）

岐阜県恵那市正家1号窯(注5)は美濃窯編年の虎渓山1号窯式期（11世紀前半）に比定される灰釉陶器であり、大量の椀・皿類を出土している。報文によると、椀2点、折縁皿、皿において内面糸切り痕が見られるとあるが、当該資料を実見したところ、糸切り痕とされた内面のℓ字形の痕跡は一部で周囲のナデ調整痕を切っており、さらに明らかにナデと思われる同様の痕跡をもつ遺物が他に多数認められるため、糸切り痕とは考えられない。しかし、報告されたものとは別に明らかに内面糸切り痕をもつ例を見出した。これは体部をすべて欠失するものの、Ⅰc類に相当する高台をもつ皿かと思われる。同窯の灰原、E－5グリッドの赤色灰層から出土したもので、色調は灰褐色、胎土は比較的緻密、焼成は軟質でやや砂っぽい。高台径6.9㎝、現存高0.7㎝、内面径7.0㎝を測る。外面は回転方向不明であるが回転ナデを施す。内面にはロクロ左回転の糸切り痕が見られ、中心部分にナデ消し痕がある。これが底部円柱づくり成形法によるとすれば、右回転ロクロ上で作業が行なわれ、底部外面には右回転糸切り痕が残っていたはずである。当資料からそれを直接知ることはできないが、同窯の出土遺物で底部外面の痕跡からロクロ回転方向のわ

かるもののほとんどは右回転であり、当例も右回転である可能性は高い。そうであれば底部円柱づくり成形でのロクロ回転方向にも矛盾はない。

また、同窯遺物には体部のらせん状の継ぎ目や体部断面の擬口縁が見られるものもあり、内面糸切り痕とともに底部円柱づくり成形を支持する証左とされ、この方法が灰釉陶器の製作技法にも見られるとの指摘がされている。

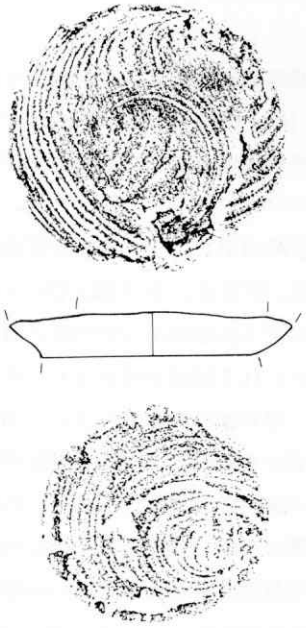
当資料は、内面糸切り痕を残さない他の遺物あるいは調整手法を異にする遺物の当該部分と比較しても形態上の差異はなく、成形技法も同一である可能性もあるが、一般に丁寧な調整を施す灰釉陶器にあっては極めて特異なものであり、類例を発見することはできなかった。したがって同窯あるいは窯跡群としてある程度空間的な拡がりをもつものか等については今のところ明らかにできない。



第3図　正家1号窯出土例
（S＝½）
＼／は糸切り痕の範囲

3　中清田古窯跡群出土例（第4図）

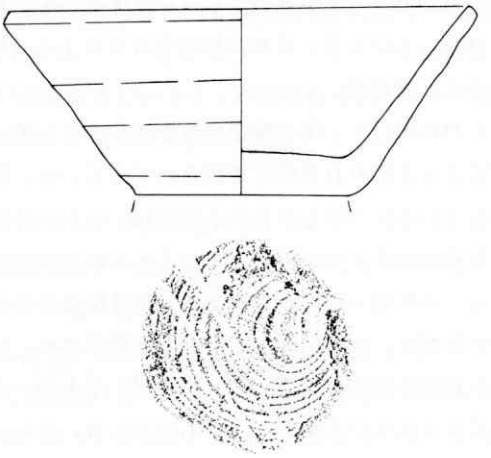
中清田古窯跡群出土の内外面糸切り痕をもつ遺物は、1－C号窯燃焼室埋土中より多数の山茶碗とともに出土したもので、出土遺物のすべてを網羅してはいないが他の2基からは今のところ見つかっていない。この遺物は器厚、形態および内面の調整痕から山茶碗底部と判断される。底径5.7㎝、現存高1.7㎝を測り、底部周縁から立ち上がる体部をすべて欠失している。高台部分は残っていないが、他の遺物からみて本来は粘土紐を輪状にした高台を2～3か所で押さえつけていたものと思われる。色調は明灰色を呈し、胎土中には約2㎜大の小石を若干含むがおおむね緻密である。焼成はやや軟質で、砂っぽい手触りである。外面には右回転ロクロで切り離された回転糸切り痕が残っており、切り離し後の調整は施していない。一方内面は周縁部に左回転のロクロで切り離したものと同様の回転糸切り痕をとどめ、中心部には回転ナデおよびナデつけが施され、それは一部で明らかに糸切り痕を切っていることが観察される。



第4図　中清田1－C号窯出土例
（S＝½）

底部円柱づくり成形を想定すると、直前の製品を切り離した後の円柱に巻き上げ成形するため、ロクロ回転方向が同じである限り内外面の回転糸切り痕はちょうどネガとポジの関係になる。先に述べたように、内面に糸切り痕を残すものはこれまで底部円柱づくり成形によると考えられてきたが、内外面にあらわれる痕跡はみかけ上逆回転になっていることが同技法の必要条件である。その意味で当例は矛盾していない。

以上挙げた資料は、いずれも底部のみで体部を窺うことができないが、成形技法上共通することが考えられる。ただし中清田例と他の例で異なる点は、中清田例は内面ナデの周囲に剝離したかのような痕跡が一部に残るものの、それがみられない部分が多く、本来体部が存在していたものが剝落したかのような印象は薄いことである。しかし、内面の糸切り痕の直径が外面のそれより大きくなっているが、これは底部周縁に巻き上げられた粘土を整形する際に底部に押しつけられたために拡がったものと思われ、体部が存した可能性も否定できない。したがって、当例も底部円柱づくり成形による製品を意図したものとしたい。



第5図　中清田1－C号窯出土山茶碗
（S＝½）

第5図はやはり1－C号窯燃焼室埋土中より出土したもので、同地点出土遺物にみられる一般的な形態のものである。胎土・色調・焼成状態ともほぼ同様のもので、底部外面には右回転ロクロによる回転糸切り痕（直径 5.6 ㎝）を残し、内面は回転ナデで、中央にはナデつけが施されている。底部の器厚は最大で 1.1 ㎝を測る。

以上Ｉ－C号窯出土の山茶碗の当該部分と比較して、形態および胎土・焼成において格別な差異は認められない。しかし、類例がなく、同窯遺物全体が同一の成形技法によるものかは不明である。

4　杯・椀類の成形技法

(1)　須恵器・土師器

研究史をふりかえってみると、古墳時代の須恵器杯の成形技法には、横山浩一・阿部義平氏らのようにロクロ水挽きによるとする説と、田中琢・田辺昭三氏らによる粘土紐巻き上げによるとする説の2つがあった。(注6) この論争は評価の方法論においてやや嚙み合わない点があるが、実物に残る痕跡を総合的に検討した場合後者の説の方がより首肯できるといえよう。(注7) その場合でもロクロでの仕上げ調整を施すため外見上からはどちらともつかないように見える場合が普通であり、痕跡を残す窯跡出土遺物などほんの僅かな資料から全体を推測しているにすぎない。

一方、平安時代の須恵器杯・椀類、一部の土師器杯はロクロ水挽き成形によるものであり、その結果底部には回転糸切り痕を残すという見方が一般的である。この成形技法により、それまでの巻き上げ－ロクロ調整という2段階の工程から、直接粘土塊より器形を挽き出す1段階の工程へと進展し、量産体制を可能にする技術的基盤が形成される。このような評価は、ロクロ技術の高度化とそれの生産体制との関連を意義づけた点において正当と考えられる。しかし、ここで注意されなければならないのは、先の古墳時代の須恵器杯の製作技法に対する論争において指摘されたように、成形技法と切り離し技法は同一段階の技法ではなく、したがって別次元で考えなければならない点である。(注8) 平安時代においてはロクロ依存度の高まりとともに成形技法も現在と同

じように水挽きになったと考えがちであるが、その根拠として糸切り痕を挙げるのは、先入観に捉われた考えであり適当ではない。すなわち、杯・椀類の底部糸切り痕はロクロ水挽きの根拠とは必ずしもいえず、それは製品をロクロ上から切り離す際の回転糸切り技法の根拠でしかないということである。

これに対して、南多摩窯址群をはじめとして、底部に回転糸切り痕をもちながら成形は巻き上げによると思われる例も確認されてきている。例えば、関東地方を中心として活発な研究が行なわれているいわゆるロクロ土師器は、ロクロを明確に使用したと考えられる酸化焔焼成の土器との共通概念をもつが、研究者によっては杯の成形を粘土紐巻き上げによるものと明確に規定している。小林信一氏はその概念としては杯は巻き上げ成形により、さらに底部切り離しには回転・静止糸切り、ヘラ切りなどがあると規定する。しかし、調整・切り離しはもちろんであるが、その前段階の成形にまでロクロを使用するもの(注9)＝水挽きによるものかという点まで一致した概念規定がなされているかどうかは不明である。また、東北地方南部の平安時代土師器である表杉ノ入式土器、同地方でいういわゆる須恵系土器の杯、8世紀中葉以降房総地域に普及するいわゆる「房総型」ロクロ土師器(注10)も巻き上げ成形により、いずれも切り離しは回転糸切り技法を用いているらしい。いまこれらの土器が巻き上げ成形によることの根拠を知らないが(注11)、巻き上げ—回転糸切りの製作技法は各地で認められている。

ところで、一般に土師器は弥生土器の系譜を引き、成形は粘土紐巻き上げ（あるいは輪積み）と考えられ、回転台を使って調整されると見做されている。その土師器の製作過程において連続して回転する台＝ロクロを使用しはじめるのは意外に早く、関東では鬼高式後期土器の杯（椀？）底部外面に回転糸切り痕のあるものが知られている。ロクロ土師器の回転糸切り技法が須恵器・土師器のいずれに由来するものかは統一的見解がないが、いずれにせよ関東地方の杯・椀類の成形技法は、先の巻き上げ例を考えあわせても非常に複雑な様相を示している。また、いわゆるロクロ土師器は、焼成等の製作技術からみて須恵器・土師器両方の技術的系譜を引くことが考えられているが、内面糸切り痕杯・椀類はより土師器的な技術を色濃く残す東日本のこうした背景があって生まれたものといえるかもしれない。

(2) 灰釉陶器

猿投窯に関しては、I—25窯式期（8世紀中葉）に底部回転糸切り痕を残す無台椀類とともに、紐作り—底部ヘラ切りによる無台杯身も存在することが確認されている。このことは、古墳時代以来の伝統技法とロクロを使って切り離すという高効率技法との時間的な接点を示している。この時期はまた原始灰釉陶器の初現期とされており、技術的な発展をみせる画期として位置づけられる。以後の灰釉陶器椀類の底部切り離しは回転糸切り、その後ヘラケズリまたはナデ調整するものから無調整のものへの変遷が明らかになっている。

従来、灰釉陶器椀・皿類は回転糸切り技法によって切り離されていることから、ロクロ水挽き成形によるものと考えられてきた。また、前川要氏はやはり灰釉陶器椀のロクロ水挽き成形を想定し、それを条件として製作工程の復元作業を通して実際の資料にあらわれている特徴を型式学的に検討している(注12)。その結果O—53窯式期を椀の調整がより丁寧なものから粗雑なものへの6段階の型式群に細分している(注13)。正家1号窯の属する美濃虎渓山1号窯式は、編年対比表によると「美濃折戸53号窯式」の第3・4段階に相当し、椀・皿の底部外面はナデあるいは糸切り痕を残

すが、内面はコテの使用度が減り、中心部にユビナデ痕を残すものが多く見られる。このような表面的な調整痕は確かに正家1号窯出土遺物でも看取される。したがって表面的にはすべて同一技法で成形されているかのようである。

一方、先に述べたように灰釉陶器にも巻き上げ成形のものがあるとの認識もされるようになってきており、内面糸切り痕をもつものもその要因の一つに挙げられている。(注14)

(3) 山茶碗

山茶碗は古代猿投窯の系譜をひいて成立した東海各地の中世瓷器系窯において、特にその初期に主体的に生産されているものであり、灰釉陶器椀類にその源が求められているものである。したがって編年的研究をはじめとして灰釉陶器研究と密接に結びついている。

瀬戸窯の山茶碗の成形はすべてロクロ水挽きによると考えられている。藤澤氏によると、それは無釉化以前の灰釉山茶椀の段階でも同一で、成形技法においても連綿と続くとの考えである。(注15) 調整手法でみると、コテ痕、指ナデ痕、ロクロ目があり、底部切り離しは回転糸切りといずれも灰釉陶器にも見られるロクロ回転力を利用した方法によっている。また、米山祐章氏はやはり復元作業を通して、山茶碗の成形をロクロ水挽きとする。加えて、瓶子等の明らかに紐作りによるものは破面から継ぎ目が見られるのに対し、山茶碗にはそのような例がないこと、法量の変化が少ないことを挙げ、巻き上げ成形とは考えられないとする。(注16)

美濃窯についても同様で、すべてロクロ水挽き成形と考えられている。底部は回転糸切り技法で切り離され、その後回転ヘラケズリやナデ調整によって糸切り痕を消すものから、無調整のものへと変化する。外面にはいわゆるロクロ目が見られる。以上からは瀬戸の山茶碗ともほとんど変わらない特徴でしかないが、美濃の山茶碗の中には内面中央の突起を擦り消した痕跡のあるのも見られるという。これが果たして突起を消そうという意図の調整か、あるいはいわゆる亀裂防止のナデつけかは判然としないが、もしそのような事実が指摘されれば、(粘土塊)ロクロ水挽き成形を具体的に裏付けることができるであろう。というのは、底部円柱づくり成形では底部は一枚の円板状をなすもので、その周縁に粘土紐が巻き上げられるため内面中央に突起は生じないからである。また、美濃山茶碗の中には内面に渦巻状の痕跡の残るものがあること、新しい時期のものは巻き上げ成形とは考えられないほど極めて薄手に仕上げていることからも、美濃窯でのロクロ技術には新たな展開があったことをうかがわせる。(注17)

常滑窯(知多古窯址群)の山茶碗については、中野晴久氏によるとロクロ水挽き成形に対して若干の疑義が唱えられている。同氏の観察によると、知多古窯址群では粘土紐巻き上げロクロ調整と考えられる山茶碗が少なからず出土しているという。そのような例は福住22・33号窯、金色東2号窯、出地田古窯、鎗場・御林古窯跡群等の出土遺物に示されるとおりである。底部はやはり回転糸切りによって切り離され、その後ナデ消されるものと残すものが存在する。(注18)

以上のように、杯・椀類の成形については、ロクロ水挽きとも巻き上げともつかない状況の中で、調整痕あるいは切り離し痕をもって成形技法を捉えているきらいが見受けられる。積極的な根拠を示すことのできる資料が出土遺物総量に対して極めて少ないためもあるが、今後十分な注意を払って検討する必要があろう。

5 出土遺跡からみた意義

これまで見てきた内面糸切り痕例は、1例を除き窯跡出土のものである。窯跡から出土する遺

物の多くが破損や焼成不良などの失敗品であることを考えれば、それは当然のことといえよう。また、残りの1例である薮田遺跡も、極めて政治的な色彩を帯びた東海系の陶工集団の居住地と考えられており、いずれも生産関係遺跡からの出土である。さらに、これらの資料が未焼成ではなくいずれも焼成されている遺物であることからも、確実に他所への供給を目的として製作されていたことがわかる。以上の点からこれらの資料は、出土状況からいえばごく一般的であり、他の遺物と何ら変わるところはない。須恵器・灰釉陶器・山茶碗の生産体制はある程度専業化された陶工集団によって支えられており、技術的にも画一化された方法で製作されていたと思われるが、これらの窯跡や生産遺跡で内面糸切りの遺物から考えられるような底部円柱づくり成形を画一的に採用していたとは、類例の少なさからいって考えにくい。したがってここでは、平安時代以降も巻き上げを伴う底部円柱づくり成形を用いる陶工集団は少なくとも存在したとするにとどめたい。

それでは、これらの遺跡には何らかの共通する技術的基盤が考えられるだろうか。南多摩窯址群については、成立当初から土師器製作者の関与が指摘されており、また元来巻き上げ成形は土師器の製作技法に由来することからも注目すべき点であろう。この点に関して、東海地方例においては土師器との関連を云々できるほどの材料はなく、むしろ灰釉陶器窯・山茶碗窯のような量産窯にとっては効率の悪い技術であるため、関連は考えにくい。しかも東海地方においては平安時代以降の土師器の出土は極めて少なく、土師器そのものの実態もはっきりしていないので、別の視点から検討せざるを得ない。一方先に述べたように、薮田遺跡において東海系陶工集団とのつながりが指摘されているが、いま問題の成形技法においてではなく、別の製作技法において認められるものである。正家例・中清田例については、いずれも窯の集中している地域からやや離れたところに位置しており、またいずれも古代猿投窯の系譜を引き、少器種大量生産という生産形態をとっていることなども、比較的類似した背景といえる。しかし時期的にみると、正家窯が灰釉陶器生産のピークに達し、美濃窯において生産地が飛躍的に拡大する11世紀であるのに対し、中清田窯は山茶碗生産も終わりに近く、施釉陶器窯と碗・小皿焼成窯とに分離しはじめ、瀬戸地区において窯跡数が極端に減少し、かわって藤岡地区にややまとまって展開する13世紀末〜14世紀前半と、若干の開きがある。(注19)

このようにみてくると、時期的にも地域的にも散発的に出現しており、いまのところ一連の系譜で捉えることはできない。当面はそれぞれの遺跡の背景を個別に捉えていかなければなるまい。

6　おわりに

今回挙げた4例は、時間的にも空間的にも散発的に出土しているのみで、しかも窯跡のような大量の遺物を出土する遺跡にあってもせいぜい1点しか出土していないことから考えて、極めて特殊な遺物といわざるを得ない。しかし、これまで見てきたように、内面糸切り痕をもつ遺物は、なかなか成形技法にまで触れることのできない歴史時代の杯・椀類にあって、成形の過程（底部円柱づくり）を具体的に示す好個の一例といえよう。

山茶碗窯においては、管見では中清田例が初の出土であり、類例が中世にまで及ぶことが明らかとなった。今回の出土により、改めて山茶碗の成形技法の問題を再検討すべきことが確認され、そのためにはより詳細な遺物の観察が必要となろう。

末文ではありますが、小稿を成すにあたり伊藤英晃、西部良治両氏にはたいへんお世話になりました。改めて御礼申し上げます。

注 1. 井上喜久男「中清田古窯跡」『愛知県埋蔵文化財情報』Ⅰ 愛知県教育委員会他　1986
正式な報告書は未刊であるが、詳しくは今後の報告書にゆずる。なお出土遺物の一部を現在当館で保管している。

注 2. 服部敬史・福田健司「南多摩窯址群の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号、神奈川考古同人会　1979

注 3. 東京都府中市国府関連遺跡では、G 5 窯式期（10世紀前半）に相当する内面糸切り痕をもつ須恵器杯が出土し、さらに埼玉県内にも数例存在が確認されているようである。

注 4. 関晴彦他『薮田遺跡』群馬県教育委員会　1985

注 5. 斎藤孝正『正家 1 号窯発掘調査報告書』恵那市教育委員会　1983
なお、同教育委員会の御厚意により実見の機会を得た。記して謝意を表するものである。

注 6. 横山浩一「手工業生産の発展」『世界考古学大系』3　1959　阿部義平「ロクロ技術の復元」『考古学研究』18－2　1971　ほか

注 7. 田中琢「須恵器製作技術の再検討」『考古学研究』11-2　1965　田辺昭三『須恵器大成』1981　ほか

注 8. 伊藤博幸「ロクロ成形技法と底部切り離し手法の考察」『古代学研究』59　1971　注 7 田辺文献ほか

注 9. 小林信一「ロクロ土師器の出現」『国学院大学考古学資料館紀要』第 2 輯　1986

注10. 白鳥良一「東北南部地方の様相」「シンポジウム『平安時代の土器・陶器』の記録」『愛知県陶磁資料館研究紀要』2　1983

注11. 佐久間豊「房総をめぐる奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題」『千葉県文化財センター研究紀要』10　1986

注12. 楢崎彰一「彩釉陶器製作技法の伝播」『名古屋大学文学部研究論集』史学 15　1967

注13. 前川要「猿投窯における灰釉陶器最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ　1984
この論文においては必ずしも成形技法の復元を目的としておらず、底部円柱づくり成形については工程が若干異なるだけで、型式学的検討に際し影響は少ないと述べられているにすぎない。

注14. 注 5.文献
なお、斎藤孝正氏より、千葉県に内面糸切り痕の灰釉陶器例があるとの御教示を得た。

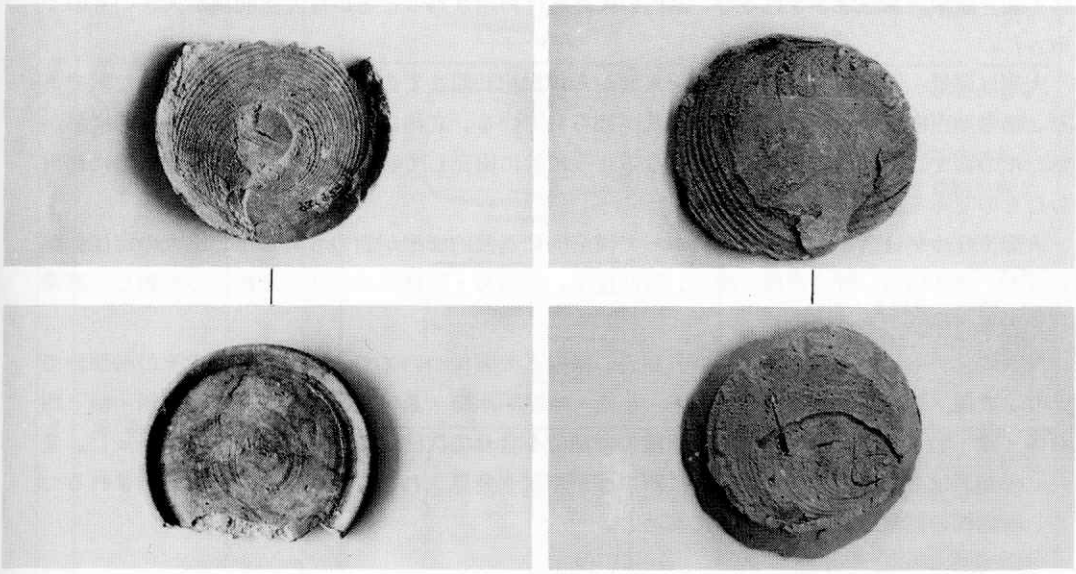
注15. 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ　1982

注16. 米山祐章「山茶碗・こね鉢の製作方法の考察」『大草第 6 号窯発掘調査報告』瀬戸市教育委員会　1982

注17. 田口昭二「美濃窯における白瓷と山茶碗」『美濃陶磁歴史館報』Ⅱ　1983　ほか

注18. 中野晴久「知多古窯址群における山茶碗の研究」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅰ　1983
また同氏は灰釉陶器椀にも巻き上げ成形のものがあるとしている。

注19. 『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅳ）瀬戸・藤岡』愛知県教育委員会　1985



正家 1 号窯出土　　中清田 1－C 号窯出土